

## 学習者の主体性を高める教育実践とは？

NPO法人言語文化教育研究所における教育実践を通して

武 一美\*・狩野倫子\*・古賀和恵\*・村上まさみ\*・〈共同研究者〉谷岡ケイ\*\*

\*NPO 言語文化教育研究所 (<http://www.gbki.org>)，\*\*ケイ商店 (非会員)

### 1. 学習者の主体性を高める教育実践とは

ことばの学習の主体は、教師ではなく学習者であると考え、日本語教育における教育活動の目標は、学習者の自己表現への自覚・発信意識の育成となる。この目標実現のためには、学習者が「考えていること」を表現化する、具体的な意味のあるコミュニケーションの場を提供することが重要である。すると担当者の課題は、具体的な意味のあるコミュニケーションとは何か、またその場をどのように提供するのか、その実践を通して日本語の表現力はどのように育成されていくのか、を常に考えて実践することとなる。

こうした問題意識のもと、早稲田大学大学院日本語教育研究科言語文化教育研究室での研究と実践を踏まえ、NPO 言語文化教育研究所 (URL, <http://www.gbki.org/> 以下、**GBKI**) を設立し、発表者らは以下の教育実践を行っている。

### 2. 教育実践

#### 2-1. 四季の講演会とワークショップ

**GBKI** 代表の細川英雄を話題提供者として、参加者が主体的な対話を実現できる、参加型講演会を行っている。ことば・文化・教育から設定したテーマのもと、各回、約 40 名の参加者による活発な議論が展開されている。▼2004 年度のテーマ：第 1 回、自分のことばを取り戻す－「考えていること」を表現する場を求めて。第 2 回、第三の言語教育をめざして－国語と日本語を結ぶ言語文化教育。第 3 回、添削と修正をめぐって－第三の言語教育への方法論。第 4 回、言語教育における協働とは何か。

#### 2-2. 日本語学習者対象のクラス

##### 2-2-1. 日本語学習者のためのライティングサポートクラス

本クラスでは「考えていること」を表現する「意味のある現実的なコミュニケーション体験」を通じ、日本語の表現力向上を目的とした言語活動を行っている。活動の軸は、学習者の「興味・関心」をテーマとしたレポート執筆活動とし、並行して、レポート執筆活動と連動させた教科書を用いた活動を行っている。これにより、主体的なレポート執筆と、それに必要な文法事項の適宜確認および過去に学習した文法事項の再整理とが統合され、学習者が自律的に学習できる環境構築を実現している。▼今後の課題と展望：学習者が考えていることをより明確に表現する表現形式の「よりどころ」として教科書を用いる方法論の開発。初級前半の文法項目確認の段階では二つの活動が乖離する傾向にあり、両活動をどのように連動させていくかが課題。また、担当者一人一人が、学習者がことばを学ぶことの意味にさらに自覚的になり、理論と実践の往還によって、主体的な学びを得られる環境をいかに創出できるか、探求を続けねばならない。

## 2-2-2. 日本語学習者のための〈ユビキタス講座〉ベルリン・プロジェクト

〔2004/11/18～2005/3/3, 担当者 1 名, 学習者 7 名, メンター 2 名〕本プロジェクトは、山田ボヒネック頼子氏（ベルリン自由大学東アジア研究所日本学科準教授）との共同により、従来のクラス活動と BBS 上の活動を統合し、ひとつの教室として構築することを目指すものである。学習者は、クラスメンバーと日本および韓国在住のメンターとのやり取りを通して 2-2-1 と同様のレポート執筆活動を行った。また、GBKI では BBS や担当者間の連絡用メーリングリストの作成など、技術的なサポートも行った。▼今後の課題と展望：学習者・大学側のコンピュータリテラシーの未習熟により BBS を十分活用できず、また、クラス活動と BBS 上でのメンターの支援が二分化するという問題も生じた。学習者の「考えていること」の表現化は、様々な他者が関わることでより豊かに広がっていく。本プロジェクトを、多様な他者と共に自己の表現を磨いていくことを実現する、新たな教室活動の可能性を拓くものとして位置付け、クラスと BBS を密接に連動させる活動を設計し、さらに充実した表現活動の場を構築することが今後の課題である。

## 2-3. 日本語教師対象のクラス

### 2-3-1. 日本語教師のための言語文化教育入門講座

〔① 2004/4～6, 参加者 3 名；② 2004/6～8, 参加者 4 名；各クラス 6 回・メンター 2 名〕教員が、教室での疑問や迷いをもとに自分自身の問題意識を探り、どのような日本語クラスを目指すのかを考え、それをまた自分自身の実践へと戻していくことを目標とするクラスである。「私にとって日本語教育とは何か」というテーマでレポートを書き、他者と意見交換を行い、そのやり取りを踏まえ自分の考えをまとめる。また、このクラスは「具体的な意味のあるコミュニケーション」とは何かを体験する場でもある。▼今後の課題と展望：現場での問題を取り上げ、現場から離れずに理想や理論を組み立て、それを現場へと戻していくためには、教室における具体的事例をとりあげて議論を進める必要がある。そのためには、受講者のみならずメンターもまた、常に自身の教育現場での取り組みを問いなおし続けねばならない。

### 2-3-2. 日本語教師のための〈ユビキタス講座〉言語文化教育入門

〔2004/8/15～9/15, 参加者 5 名, メンター 2 名〕コンセプトは対面型のクラスとほぼ同一であるが、インターネットに設けた掲示板を教室とした。▼今後の課題と展望：掲示板という「書く」行為のみでの対話の特徴を分析し、マイナス面は補強しプラス面をより活性化する必要がある。その介入の方法論を現在構築中である。

## 参考文献

細川英雄 (2002) 『日本語教育は何をめざすか－言語文化活動の理論と実践』明石書店

細川英雄 編 (2002) 『ことばと文化を結ぶ日本語教育』凡人社

細川英雄 + NPO 法人「言語文化教育研究所」スタッフ 編 (2004) 『考えるための日本語』明石書店